Ⅲ．ベトナム国家大学（ハノイ）外国語大学への教員派遣事業

１、派遣教員、奈良女子大学研修生

派遣教員	鈴木康史	奈良女子大学文学部人間科学科准教授
研修生	岡崎沙織	奈良女子大学大学院人間文化研究科　研究員 （社会生活環境学専攻）

２、派遣期間および現地での活動

平成 23 年 11 月 13 日(日)～20 日(日)

内容：

11 月 13 日(日)　出発　(関空～ハノイ)

11 月 14 日(月)　トゥエン副学部長と講義についての打ち合わせ

11 月 15 日(火)　講義

11 月 16 日(水)　講義

11 月 17 日(木)　講義

11 月 18 日(金)　講義

11 月 19 日(土)　帰国　(ハノイ発)

11 月 20 日(日)　関空着

３、事業概要

３－１、　講義日程　　講義テーマ「現代日本の社会と文化」

11 月 15 日　13：30～16：30

講義のイントロダクション（アンケート）

日本のサブカルチャーと戦後史について

11 月 16 日　13：30～16：30

日本のマンガ史概説（作家論を中心に）

11 月 17 日　13：30～16：30

現代日本の社会と文化

特に 3・11 の震災後の日本について

11 月 18 日　13：30～16：30

学生交流プログラム「能の所作について」

受講生たちによる課題の発表会（成績評価を兼ねて）

３－２、　講義概要

①11 月 15 日

まず、講義のイントロダクションとして、学生たちの日本語力と基礎的な知識を知るために、学生たちに、①なぜ日本について勉強しようと思ったのか、②知っている日本のマンガ、アニメ、③知っている日本の歌手、アイドルなど、④日本で 3 月 11 日に起こった地震、津波、そして原子力発電所の事故について、あなたの考えたこと、を書いてもらい、それに対するリプライや、こちらの自己紹介なども行った。

講義のイントロダクションとして、日本マンガの独自性について講義した。ベトナムに限らず、多くの外国人にとって、「マンガ」を大人が読むということがまず驚きの対象となることから、そうした世界に類のない独自の発展を遂げた日本マンガについて講義することは、他の諸外国とは異なった戦後の日本の歴史や文化を知ることにつながるということを講義した。

続いて、具体的な各論に入った。戦後日本マンガを作り上げた手塚治虫について講義し、大塚英志の「傷つく身体」という概念を紹介しながら、手塚が戦争という極限状況の中で産み落とさざるを得なかった独自の表現形式が日本マンガを大人も読めるものに変容させて言ったことを講義した。難しい概念ではあったが、映像や絵による具体的な説明を中心とすることで、かなり理解されていたと思う。

②11 月 16 日

前日に引き続き、この日は、ベトナム人ならだれもが知っておりと言われる藤子不二夫について講義した。ベトナムにおいて『ドラえもん』は子供向けのアニメ、マンガとして有名であるが、一見円環する時間の中で成長しない主人公たちが繰り広げるコメディタッチのマンガの中にも、傷つきながら成長するのび太、という「傷つく身体」のエピソードが登場していることなどを解説し、藤子不二雄が手塚の系譜上にあることなどを解説した。『ドラえもん』という知名度の高い作品のおかげで、学生たちは非常によく理解してくれた。

残りの時間では、梶原一騎のスポ根について簡単に触れ、それを引き継いだ現代最も影響力のあるマンガ家である井上雄彦について講義した。井上雄彦の『スラムダンク』は、アニメで知っている学生もそれなりにいたが、現在連載中の井上のマンガ『バカボンド』『リアル』を紹介することの時間をかけた。こちらは誰も知らなかったので、丁寧に説明したが、少し難しかったようだ。しかし、『リアル』は、障がいを持った若者を通して「傷つく身体」が主題化されていると同時に、フリーター、親子関係などで悩む若者など、まさに現代の若者の生身の姿を切り取ったマンガであることを紹介し、井上雄彦が日本マンガの一つの到達点であるということを結論として、講義の締めくくりとした。特に、直前に出た最新巻では、震災をにおわすようなテーマがおりこまれていることを紹介して、次

の日への導入とした。

③11 月 17 日

この日は、現代日本の文化について、特に、3・11 の大震災後の日本の社会について、学生たちに生の声を聞かせることを主眼とした。必ずしも理論的にまとまった話ができたわけではないが、昨日までの講義が取り扱った「戦後」という歴史的な枠組みがついに終焉し、「震災後」という新しい枠組みで語られる時代に入っているのだ、ということを強調した。

また、ベトナムと日本との共通点と差異について大きな枠組みでの仮説を提示した。すなわち、中国の周辺国であるという地政学的な相同性による共有される面と、アメリカとの関係という決定的な相違点があること、そして、こうした条件が、今後大きく変わってゆくかもしれないということ、この時代の流れを理解することがベトナムの人々が現代日本の諸文化を理解する時に最も重要な視点ではないか、という点についても講義した。

リアルタイムな生々しい問題であり、非常に興味を持って聞いてくれたと思う。

④11 月 18 日

授業の前半は学生プログラムで、研修学生岡崎による能の所作の実技を行った。能の謡本の現物を持参し、学生たちに実際に読ませるなどの工夫をしてもらい、また、すり足については実際に練習をしてもらった。学生たちにとっては初めての経験ばかりで、非常に楽しそうであった。

後半は、成績評価も兼ねて、ベトナム語で書かれた日本についての文章を日本語に訳してくるという課題を与え、それを口頭で発表してもらうという授業を行った。文章はその場で私が添削し、また、発表についてはコメントを行った。

学生たちの日本語能力は高く、また、日本理解も的確で、非常に高度な議論ができた。